

「新しい基準、協働による社会変革を」

日本ソーシャルワーカー協会
副会長 保良 昌徳

2012年の最後の月となり、一年の振り返り、新しい年や年度のあり方などを考える時期となった。マスコミは連日、衆議院の解散から国政選挙、日ごとに変化する政党の離合集散の話題をくり返し伝えている。我が国の政治のトップが入れ替わろうとしている今年は、我が国に直接的な大きな影響を及ぼす周辺国や大国のトップが入れ替わった年でもあった。新しい年において、これらの新しい政治家たちの中で、つつましく平和な生活を望む国民一人ひとりの生活が左右され、翻弄されるであろうことは誰もが認めざるを得ない事実である。

社会を見わたせば、ノーベル賞やスポーツの活躍などの嬉しいニュースがある一方で、暴力や殺人、いじめや虐待、自殺などのニュースが後を絶たない。海外では、飢餓や飢え、貧困や災害に苦しむ多くの人々がいる事実を尻目に、内戦や軍拡に力を入れ、領有権をめぐるお互いを威嚇し、ミサイルまでも飛ばそうとしている。国益や国の威信という大義のもとに、トップの意地のぶつかり合い、力による威嚇、また意図的とも言えるプロパガンダによって他国のイメージを傷つけ、しのぎを削る様子は、家族を愛し平和に暮らしたいと望む冷静な国民に、どれほどが支持されているのかと疑いたくなる。

本当に、テレビでトップが語る社会や国のあり方が本当に正しいのであろうか。本当に、政治の実権を握る人達の言う政策を信じ、我々の社会や人類の未来を託してもいいのであろうか。人類の平和を考え人材を育てる手段であるはずの教育が、他国の悪いイメージや敵意を植え込む手段となっていないのか。一人ひとりの理解に貢献すべきマスコミが、刹那的な娯楽番組や単なる扇動の手段であっていいのか。世界は確かに、言葉の壁や地理的な距離によって、それぞれの国民が分断されている。しかし、たまたま生まれ出た国の教育や報道によって意識が左右され、平和を願っているはずの無欲な人たちが武器を取り合い、戦い、命を落とさなければならないのか。人類は、いつまで同じ過ちを繰り返すのであろうか。

これまで我々人類は、あまりにもトップの人間に期待し過ぎたのではないかと。桃太郎や黄門様のような善良な英雄によるマジックのような世直しを夢見すぎたのではないだろうか。政治のトップに対する期待や夢は、テレビのヒーロー・映画スターにあこがれ、自分を投影して我を忘れる子供・若者の姿と同じではなかったのか。そのような漠然とした期待や委任が、人類の歴史を戦争の歴史に塗り替えてしまったのではないのか。

力のある者となない者、影響力のある者となない者、政治家と国民、中央と地方、既得権のある者となない者、知るものと知らない者、できる者とできない者、いろいろな人間がいることは誰でも分かる事実である。しかし、これらの人間や集団間にある大きな影響力・豊かさ・権限の乖離は埋めがたいほど大きな溝である。おそらく、どの歴史においても、後者は前者に力には反論すらできず、その意図に従わされ、その言葉の下に忍耐を強いられてきたであろうことは想像に難くない。どの歴史書も、前者を中心に書かれていることから、その格差は明かである。

これまで人類が、政治家や権力者に期待し委ねてきた政治的原理に基づく平和社会づくりの手段には、大きな欠陥があり限界にあることは明かである。今後一人でも犠牲者を減らすために、権威に期待し委任するのではなく、新しい原理・方法を構築しチャレンジすべき時に来ている。そのために我々は「ソーシャルワーク」という旗の下に集まっている。幸い我々には、多くの実践理論や実践例があり、加えて、歴史の中には、偉大な先達（例：ガンジー、キング牧師、マザーテレサ等々）も多くある。人間や社会の「Well-Being」「人権」を考え「社会変革」を標榜する個人（団体）として、これらの先達にならい、すべての権威や壁を越え、自由な視点を持った一市民（ソーシャルワーカー）として、世界の志を同じくする仲間たちと手を取り合い、内外の問題に真剣に取り組むべき時であると考えます。